

日々の暮らしを支える「木曾の水の中継点」

愛知県犬山市



犬山城

■犬山市の紹介

犬山市は、愛知県の最北端、木曾川が濃尾平野へと流れ出る木曾川扇状地（犬山扇状地）の扇頂部に位置しています。古くから尾張・美濃国境が隣接する地で、戦国時代には羽柴（豊臣）秀吉がこの地で小牧山の徳川家康と睨み合うなど、係争の地ともなりました。江戸時代に入ると尾張徳川家の付家老成瀬氏の城下



町として発展してきた、長い歴史を有するまちです。

昭和29（1954）年、1町4村が合併して犬山市が誕生し、今年で市制施行60周年を迎えました。現在の犬山市は名古屋鉄道が市内を東西南北十字に貫くなど、名古屋市近郊の交通の要衝として発展を続けています。

■犬山城と木曾川

北原白秋が川岸に聳える美しい姿を「木曾川の白い兜」と讃えた国宝犬山城は、天文6（1537）年、織田信長の叔父である信康によって築城され、その天守閣は築城当時のものが現存する日本最古のものと言われています。

江戸時代には儒学者の荻生徂徠が、李白の詩「朝に辞す白帝彩雲の間、千里の江陵一日にして還る…」にちなんで、木曾川を長江に、犬山城を白帝城

に例えて、以来別名を白帝城と呼び犬山市のシンボルとなっています。

また、城下を流れる木曾川では、1300年前には早くも鵜飼が行われていた記録が見られ、江戸時代初期には城主成瀬氏の命で御料鵜飼が始まったとされています。犬山城を背景にかがり火が幽玄の世界を演出する伝統的な夜の鵜飼の他に、近年では、鵜匠の操る鵜が鮎を捕る様子を、明るい所で観察のできる昼鵜飼も楽しむことができます。

昨年は、木曾川鵜飼の長い歴史の中で初の女性鵜匠が誕生して話題となり、2万5千人を超えるお客様にお越しいただきました。



木曾川鵜飼

犬山連絡導水路



(木曾川の取水口)



(愛知用水への放流口)

この愛知用水二期事業(昭和56年度～平成18年度)では、国内最大級の農業用ため池である入鹿池(犬山市)から水の融通を受ける入鹿連絡導水路も整備され、水の高度利用が進められてきました。

犬山市は、前述のとおり濃尾平野の最上流に位置するという地理的な特徴から、上水道や農業用水等の様々な水がここから濃尾平野へと送り出されています。どれほど科学が発達しても、このような地形は人為的に生み出せるものではありません。農業・工業ともに全国有数の生産高を誇り、多くの人口を擁する愛知県で、木曾川の水の恵みを生産者へと受け渡し、県民の日々の暮らしを支える「木曾の水の中継点」犬山の役割はこれからも変わることなく、未来に向かって次の歴史を刻んでいきます。



木曾川(犬山頭首エライン大橋上流から)

■水の要衝

犬山は交通の要衝であると同時に水の要衝でもあります。木曾川からは犬山市上水道だけでなく、愛知県営上水道、名古屋市上水道、濃尾用水、さらに愛知用水が水を取り入れており、多い時には一日510万立方メートル、実に名古屋ドーム3個分の水が取水されていることとなります。

このうち、犬山連絡導水路は、愛知県企業庁が増大する水需要をまかなうため、味噌川ダム(長野県)等で開発した水を犬山地点で取水し愛知用水幹線水路へ導水するため愛知用水二期事業第1回計画変更(昭和60年)で追加されたものです。